【報告】第44回パラリンピック研究会 ワークショップ 「パリ2024パラリンピック競技大会 日本代表選手団報告会」

1．プログラム

2024年11月27日（水）オンライン開催

10：00～10：05	開会挨拶
10：05～10：35	講演 「パリ2024パラリンピック競技大会　日本代表選手団報告」 田口亜希（日本代表選手団　団長）
10：35～10：45	論評 「パリ2024パラリンピック競技大会についての仏紙報道分析」 小倉和夫（日本財団パラスポーツサポートセンターパラリンピック研究会　代表）
10：45～12：00	総合討論 モデレーター：藤田紀昭（日本福祉大学スポーツ科学部　教授） パネリスト：河合純一（日本パラリンピック委員会　委員長） 渡正（順天堂大学スポーツ健康科学部　准教授）

2．講演

パリ2024パラリンピック競技大会　日本選手団報告

田口亜希

皆様おはようございます。ただいまご紹介いただきました，パリ2024パラリンピック競技大会日本代表手団団長を務めました田口亜希です。どうぞよろしくお願いいたします。団長のお仕事がどんな内容なのかというところで，今回団長のお話をいただき，私には何ができるのだろうとすごく悩みました。特に過去三大会，平昌大会から偉大なメダリスト，この後登場されます河合さんをはじめメダリストが団長を務められましたので私に何ができるのだろうとすごく悩みましたが，背伸びはせず自分らしくやっていこうと決めて引き受けました。

団長の仕事としましては，メインは各会場に参り日本選手を応援したり，また二日から三日おきに選手村内で開催されます団長会議に出席しました。こちらは最初の数回出席しまして，途中からは事務局の方に変わったりもしました。また，大使館を訪れたり，日本選手団棟を訪れる他国の方々と対話をしたりしていました。今日は私見がかなり含まれていますが，そんなパリでのいろんな経験を報告させていただきたいと思います。お願いします。

パリ大会は皆様もご存知の通り８月28日に開会式が行われ，12日間開催されました。参加国は地域・難民選手団を含む168カ国になります。参加選手は約4,400名，競技は22競技549種目になります。オリンピックではブレイキンが競技に加わったりしましたが，パラリンピックの競技は東京大会と変更なく22競技行われました。今回はテレビとかでもご覧になった方もいらっしゃると思いますが，二大会ぶりの有観客で東京・北京大会とちょっと雰囲気が違った感じでした。また，チケット販売枚数は約250万枚で，完売の会場もありました。

競技の多くがパリ中心部で行われ，特に17の競技会場のうち世界遺産が五会場ということで，会場に行きましても雰囲気が違ったり，すごく情緒的なところがありました。この会場の雰囲気もパラリンピックを盛り上げてくれたと私は感じておりました。エッフェル塔スタジアムではブラインドフットボール，ベルサイユ宮殿では馬術，アンヴァリッドではアーチェリー，グラン・パレでは車いすフェンシングとテコンドー，そしてアレクサンドル３世橋ではトライアスロンが行われました。また，初めてスタジアムの外で開催された開会式はシャンゼリゼ通りからコンコルド広場までのコースで行われました。この開会式が行われたコンコルド広場も世界遺産に含まれており，私も参加いたしました。シャンゼリゼ通りを事前に見たところ，石畳なので私たち車いすユーザーはどうやって行けるのかなと思っていましたが，開会式の頃には何メートルかの幅はアスファルトで埋められていて，車いすユーザーも動きやすくなっておりました。多分全部は埋められていないので，終わった後はアスファルトが剥がされるのかなと思います。もちろん車いすユーザーが通りやすくすることも大切ではありますが，やはり街の雰囲気や歴史的な石畳をずっと使用していくことも大切ですので，そこは用途に合わせて今回は開会式の時だけ整備されたのではないのかなと思っています。終わった後に見に行けていないのでどうなったのかは確認できておりません。

日本代表選手団についてですが，今回の日本代表選手団のスローガンは選手・スタッフの皆さんの投票で決定しました。「挑め，自分史上最強。」です。このスローガン通り

に選手たちは自身の限界に挑み，また，パラアスリートの無限の可能性そしてパラリンピックの価値を体現したと感じております。こちらの写真に写っているのは旗手を務めたお二人になります。そしてこちらは選手村の中にあるシンボルマーク，アギトスです。団長の私一人では知識もありませんし，力もありませんので，副団長のお二人もついていただきまして，井田副団長と中澤副団長を含めた３人で基本的には移動や応援をしていました。ただ，全員で一緒に行動すると全ての会場を見ることができないので，計画してさまざまな会場を訪れていました。

ここからは結果も含めて日本代表選手団の報告をします。今回，選手・競技パートナー194名そしてスタッフ136名，総勢330名，海外で行われたパラリンピック競技大会では最大の選手団の編成となりました。新型コロナウイルス感染症のため東京2020パラリンピック競技大会が一年延期となり，選手の皆さんは通常より一年短い三年間でパラリンピックに出場するためのポイントや資格等を獲得しなければいけないという厳しい状況ではありましたが，皆さんの努力そして多くの方々の支えにより国外開催の大会では史上最大の日本代表選手団の編成となりました。やはり一年短いとポイント等が獲得できる大会が減るため，その中ですごく頑張ってみんなが取ってきた価値のある枠ではないかなと思っております。

日本代表選手団のメダル数は，大会初日の８月29日に水泳の鈴木孝幸選手が金メダル一号を獲得し，その後皆の勢いもつき，金メダル14個，銀メダル10個，銅メダル17個の合計41個となりました。日本選手団は実施22競技中21競技に参加，そして選手・スタッフの約８割が初めて，または２回目のパラリンピック参加になります。金メダル数については前回の東京2020大会の13個を超えて14個，過去最多となる８競技で金メダルを獲得しております。男女混合の団体競技として車いすラグビーが史上初の金メダルを獲得，また男子団体競技としてゴールボール男子が史上初の金メダルを獲得しました。その他に車いすテニスのダブルス・シングルス女子，そして柔道女子，卓球シングルスが史上初の金メダルを獲得しました。また今大会で初めてメダルを獲得した選手も複数おり，競技団体と共にJPCをはじめとする皆さんが行ってこられた強化の取り組みが結果につながったと私自身は感じております。今大会で初めてメダルを獲得した選手も複数おりまして，四年後のロス大会に繋がっていく結果ではないかなと思います。日本パラリンピック委員会のメダル獲得数目標は過去大会の記録を上回ることを掲げておりました。メダルには届かなかったり，実力を発揮できず悔しい結果だった選手もいると思いますが，過去には破れなかったライバルを制した競技やパラリンピックレコードを打ち出した選手，東京大会から始まったバドミントンなど同種目で２連覇を達成した選手

など，それぞれの壁を超えた選手も多くいます。ですので，今回大会は史上初が多かったと感じております。

ここからはパリ2024パラリンピックの様々な部分のお話をしていけたらと思っています。

ボランティアは190カ国以上から約30万人の応募がありました。東京2020大会ボランティアの応募者数は20万4000人ちょっとということでしたので，そちらを超えたボランティアの応募がありました。ボランティア総数はオリンピック・パラリンピック合わせて４万5000人，そしてその中には障がいのあるボランティアも含まれておりました。2012年に開催されたロンドン大会では障がい者の方がボランティアに４％いたそうです。2024年パリ大会は６％を目指すと公表されていました。結果を見つけることはできませんでしたが，色々な障がいのあるボランティアも活躍されたのではないのかなと思っています。日本選手団にも視覚に障がいのあるボランティアの方が付かれており，私も何人かお見かけしました。

また，パリ大会は環境への配慮という点で，大会中に観客に提供される食事の60％がベジタリアン食であったり，使い捨てプラスチックの使用半減，そして食べきれなかった食品は堆肥化またメタン化によって回収をしていました。私も会場に行った時に見かけたのは，飲み物をペットボトルではなくプラスチックのコップに入れ，それを戻すとリファンドされるという仕組みだったり，競技関係者が入るラウンジで提供される飲み物もペットボトルではなくガラス瓶のボトルだったりしました。

次はオリンピック・パラリンピックのエンブレムとマスコットについてです。皆さんはどうでしたでしょうか。私はこれが発表された時，最初は驚きました。私は東京大会の時にエンブレム・マスコットそれぞれの選考委員を務めたのですが，その時はオリンピックとパラリンピックでは同じデザインでは不可というルールでした。ですので東京大会のエンブレム，野老朝雄さんが作成されたエンブレム，オリンピックは丸く繋がっており，パラリンピックは上が開いているものです。あのデザインは全然違いますが，あれでも似てる，似てるとすごく言われました。でも，今回のパリ大会では，オリンピックとパラリンピックでエンブレム・マスコットが同じだったことに驚きました。時代の流れなどもあるとは思いますが，そういうのが今回のパリでは違っていたと思います。また，マスコット，パラリンピック・フリージュについてもパラリンピックは義足を履いているという違いだけでしたので，このあたりも時代によって変わってきていると思いました。エンブレムを統一することで会場やパリの街の装飾なども，オリンピック開

催時とパラリンピック開催時に変更せずに使えるということで，すごくサステナブルで良いのではないかと私は思いました。

ここからは選手村についてお話しさせていただきます。選手村には様々な棟があり，それぞれの国に棟が割り当てられています。今回日本選手団は二棟与えられていましたが，日本のように参加人数が多い国は棟で与えられていきますが，参加人数が少ない国は例えばフロアーごとに与えられ一つの棟に何ヶ国も入ったりします。今回，日本選手団棟はこのような外観になっております。こちらはオリンピックの時から使われており，装飾などはオリンピックから引き継がれてパラリンピックでも使用したものも含まれています。

私はいらっしゃったお客様をお迎えできるように団長部屋をご用意いただいていました。ただその部屋は結局途中で別件で必要となったため，他の用途で使用しました。団長部屋の割り当てがあった当初も，なるべく一階部分の日本選手団の本部にいるようにしていました。皆さんのいろんな会話が聞こえてきたり，会話する機会が合ったり，ガラス張りになっているので，前を選手が通ったりスタッフが通ったりすると見えるので，気になる選手がいると外に出ていって声をかけたり，選手やコーチ・監督・スタッフの皆さんもガラス割りになっているので中に入ってきてお話できたりするので，選手村内にいる時にはできるだけそこにいてコミュニケーションを取り，雰囲気が分かるようにしていました。

部屋については，選手もスタッフも左下の写真のような一部屋に二人で入るのが基本でした。また，右下の写真ですが，パリにも雨戸があり，くるくる回して上がったり下がったりするようになっていました。選手村でもいろんな工夫がされておりコンセントの位置も少し上の方についていて車いすユーザーの選手たちもつけやすいように工夫されていました。また，部屋に置かれたゴミ箱は紙のゴミ箱になっており，サステナブルになっていました。右の二つの写真は延長コードで，その中にUSBや様々な機器のプラグが付いており，最初見た時はおしゃれだなと思いましたが，実は四面全部に施されていまして，コードが結構硬かったので横に置けなくていつも縦になってしまい使いづらかったりもしたので，今後も工夫が必要だと思いました。選手村内のお部屋についてはシャワーで，車いす用のチェアもあったので車いすユーザーもこのチェアに乗り移ってシャワーを浴びることができるようになっていました。

そして，今回の日本選手団の初めての試みとしてリラックスルームを設けました。一つの部屋にソファーを置いたり，団長・副団長のおすすめ漫画やゲームを置いていました。トランプもありましたが，一番人気だったのが黒ひげ危機一発！ゴールボールの選

手がすごく楽しんでくれました。私も今回初めて見たのですが，オセロも視覚に障がいのある人が分かるように枠が全部ちょっとだけ出っ張っている工夫がされているものもありました。リラックスルームには Home in Paris という名前を付け，JPC の方々が暖簾も作ってくださって入り口に掲げ，選手たちもここでくつろいだり楽しんだり，他競技の選手同士がゲームをして楽しんでいる姿も見受けられました。

選手村内のモビリティの部分についてです。まずは東京大会の様子になりますが，選手村を走るモビリティが用意されており，スロープが出るようになっていました。私たちも東京2020大会の時に選手村内を見て回ったり移動の際に使用しました。パリの時は簡単にスロープが出せるようになっていました。このように三年間でもかなり進化してきている，技術の進化を見ていただけるのではないのかなと思いました。

また，選手村内はかなり広いですし，パリの選手村は傾斜もありました。そこを選手たちが簡単に動いたりできるようにトヨタが手動式の車いすを一時的に電動に変えることができる装置を用意していました。また，ブリヂストンの自転車が提供されておりました。東京大会の時はステーションがあり，ステーションで乗り降りするシステムでしたが，パリ大会では乗り捨てがオッケー，好きなところで置いてある自転車に乗り，自分の目的地に置いてくることも可能でした。日本選手団の棟は少し食堂などから離れていたので，日本選手はこの装置を使用された方が多かったのではないでしょうか。

次は選手村のダイニングになります。万国旗が並んでいる場所を過ぎるとその先にダイニングがあり，ここが選手たちのフォトスポットになっています。ダイニングに入ると真ん中がメインストリートのようになっており，そこにも少しお料理が置いてありますし，左右にそれぞれ部屋があり，アジアの食事など様々な部屋に分かれていました。今までの大会のダイニングは一つの広い部屋でしたが，今回は少し雰囲気が違っていたように思います。ダイニングの中は車いすユーザーでもカトラリーなど全て取りやすい位置に置いてありましたし，ちゃんとトレーを置ける台も置いてありましたので取りやすくなっていました。食事についてはオリンピックの時に様々な報道がされていたと思いますが，パラリンピックの時はすごくメニューが豊富で，サラダもたくさんありました。また，オリンピックの時には大豆ミートしかないと言われていたと思いますが，パラリンピックの時には牛肉・豚肉・鶏肉・ラム肉そしてお魚もたくさんあり，大変美味しくいただきました。

そしてパリらしいのは選手村の中にミシュランの星付きのシェフたちが作る食事のキッチンカーがあり，一品だけお昼と夕方に出ました。多分毎日何食という制限があり，

私はほとんど応援に行っていたので一回しか食べられませんでした。私が食べたお料理の名前はゴールデンエッグ，金メダルを取るには食べとこうと思ったのですが，下がイカスミのソースで，上に半熟卵に金箔が乗っている形ですごく人気があり，時間がずれると全部売り切れたりしていました。こういう面でも選手たちはパリ，フランスを少し感じられたのではないのかなと思います。また，他にもキッチンカーがあり，焼きたてのフランスパンやちょっと甘いパンなども食べられるようになっており，人気が高かったです。

選手村のダイニングで東京大会までとの違いを感じたのは，陶器のお皿と金属製のカトラリーが使われていた点です。東京大会までは紙皿やプラスチックのフォーク・ナイフ・スプーンが使われていました。東京大会の際にも，陶器とまでは言わずも，プラスチックのお皿で何回も使えるようにしてはどうかという案をみんなで出して検討しました。しかし，洗うための大きな洗浄機が必要になり，それを選手村に置くことはできず，そうすると外に置くことになるので使ったお皿などを運ばなければいけないとか，機械を冷やすためのクーラー設備を作らなければならないといったことが懸念点となり，結局そちらの方が環境的に問題が生じるのではないかということで東京大会の時は紙皿になったという経緯がありました。実は，車いすユーザーは陶器だと膝の上に置くと落としたりして危なく，パリ大会のダイニングでは実際に落として割れたりもしていました。三つのトレーを一度に運べるワゴンが用意されてあり，私はワゴンに入れて他の人に運んでもらっていました。これまでの選手村はペットボトルのお水などが置いてあったのですが，今回のダイニングではプラスチックのカップを使ったり，ファミリーレストランのようなジュースサーバーやウォーターサーバーがあり，選手はそれらを混ぜたりしながら工夫をして楽しんでいたと思います。

また競技会場について全体的な部分で申し上げますと，東京大会そして北京大会と無観客が続きましたが，パリでは有観客だったのでギャップが激しかったです。いずれの会場も多くの観客の方がいらっしゃっており，陸上とか水泳は予選の時からたくさんの観客が入られていました。この写真はラグビーの決勝の時，そしてこちらの写真は左側が水泳会場，右側がフェンシング会場になります。対フランス戦だと完全にアウェイ感を感じることはありますが，試合が終わった後は本当にみんなが一体になっていました。たとえフランスが負けたとしても，フランスの方は勝者に対してリスペクトの拍手を送られていましたし，メダルセレモニーにも皆さんが参加されて，エールを送っていました。この動画はブラインドフットボールの会場ですが，このような感じで延々と

ウェーブも起っており盛り上がったと思っています。パリ2024大会組織委員会のスローガンは Games Wide Open，広く開かれた大会，その名の通りいずれの会場も連日多くの観客で，国・地域関係なく温かい声援をいただき，本当に素晴らしい大会であったと思いますし，その観客の方々がパラアスリートの魅力を通してより良い社会を作るための社会変革が生まれていくのではないかと，このように多くの観客の方に見ていただくとそのような変革が生まれていくのではないのかなと実感しました。

次に，少し残念だった点についてお話しします。パリだけに限りませんが私たち車いすユーザーの車いす席のちょうど視界の部分に柵があり，ちょっと見づらかったです。対面から私を見た人が頭の上だけが見えていたよとおっしゃいました。以前リオ大会の時も同じような経験をして，東京大会の組織委員会の方々にはリオ大会が終わった後にその写真を見せて，建築法的に問題がなければできるだけ車いすユーザーが見られるようにしていただきたいとお伝えしていました。結果的に無観客になってしまったので東京大会がどうだったのかはわかりません。

また，最近は多くの方々にメディアを通じてパラリンピックを見ていただいていますが，パリ大会のメディア席について，おそらくオリンピックとパラリンピックはほぼ同じように作られており，オリンピックの時はメディア席はメディアの方でいっぱいだったのではないかと私は勝手に思っています。この写真は水泳の会場で，ちょうど鈴木孝幸選手の金メダル授与の時ですが，観客席はいっぱいに埋まっていましたがメディア席のみがスカスカした感じになっていました。私見ではありますが，各国のメディアの方々の中では，日本のメディアの方はすごく多かったのではないかと思います。東京大会からはかなり減った感じはしますが，世界と比較すると日本のメディアの数は多いと思っています。ただ，こうした状況を見ると，国によってはパラリンピックをあまり取り上げない国もあるのではないかと寂しい気持ちになりましたし，開催経験のある日本がどうしたらパラリンピックをもっと取り上げていただけるかについて考えていくことも必要だと感じました。

選手村の中にまた戻りますが，選手村内に選手たちがちょっと遊んだりトレーニングできる施設があります。左上の写真のジムは多くの選手が使っておりました。右側の写真は選手たちがコーヒーや軽食を取れるような施設になっており，選手村内は選手たちみんなが楽しく過ごせるようにはなっていたと思います。

こちらの写真は先ほど見ていただいた日本代表選手団の棟になります。先ほどの写真ではガラスには何も貼っていなかったのですが，帰国する時にはメダリストの号外が日本選手団棟のガラスに多く貼られていました。また，メダリストの顔写真も貼り出し，

ガラス一面では足りず反対側にも貼っていく必要がありました。そのような点からも日本の強化が少しずつ進んでいっているように感じました。では，なぜ強化が進んでいっているかを考えた時，多くの方が感じるのが2019年に完成したNTCイーストをパラ競技種目が優先的に使える強化拠点とし，多くの競技団体が使用していること。そして選手発掘プログラムについては，J-STARプロジェクトで発掘された選手が今回のパリ大会には８名参加し，２名が金メダルを獲得しています。また，東京2020大会のレガシーでもあるオリパラ連携についてです。今大会でもJOCの方々と事前にお会いしたりオリンピックが始まった後も様々な情報共有をして連携できました。先ほど見ていただいたリラックスルームは先にJOCがアジア大会でカフェをされたとお聞きし，JPCでも工夫をしました。今後については，J-STARプロジェクトの取り組みなどを知らない方もたくさんいらっしゃると思いますので，より多くの障がいのある人に情報が届くように工夫する必要があると思います。

今回私が団長となり，パラリンピックを開催する意義について考えました。開催の意義はいくつもあります。観客の方々は障がいのある・なしではなく，スポーツの大会としてパラリンピックを楽しんでいるのではないかと感じています。また，モビリティや車いす席など，今回不具合があったかもしれないけれど，次の大会にどう生かそうと考えていけることも意義だと考えます。東京大会で私はアスリート委員会に入っており，様々な工夫をしました。私たちは完璧だと思っていましたが，もしかすると東京大会に参加したフランスのアスリートが「ここはもうちょっとこうした方がいいんじゃないか」「これは良かったからパリでも実行しよう」と感じて検討されたと思います。したがって，今回のパリ大会の内容を検証して次の大会に活かしていく，そしてパラリンピックだけでなく世の中に広めていったり，様々な障がいのある方に当てはめていくこともパラリンピックを開催する意義なのではないかと思っています。

冒頭にお話した通り，今回私は団長としてまずは自分らしくということを心がけました。まずは笑顔で挨拶することを心がけていました。選手からは最初の方はなかなか声をかけてもらえませんでしたが，途中から選手から体調や気持ちの相談を受けたり，元気に挨拶をしていただいたり，コミュニケーションを取ることができたと思います。いたらぬ団長ではありましたが選手・スタッフそしてJPCの皆様をはじめ，様々な方々に支えていただきパリ大会を終えられたことは私自身とても嬉しく思いますし，改めてパラリンピックを開催する意義を感じたパリ大会でした。

以上となります。ありがとうございました。

３．論評

パリ2024パラリンピック競技大会についての仏紙報道分析

小倉和夫

皆さん，こんにちは。私は，フランスの主な新聞，保守系のフィガロと革新系のル・モンド，そして若干の週刊誌などの報道を中心にフランスが今回のパリ・パラリンピックをどう見たかについてお話したいと思います。

オリンピックと分離して話すことがなかなか難しいところもありますが，一言で申し上げるとパラリンピック全体の運営について，競技場は歴史的にはスポーツと全く関連のない施設を多く使いました。セーヌ川や街の広場，そして美術館などを使っているわけです。これをフランスの人たちがどう受け受け止めたかについて，パラリンピック開会式のメッセージから考えてみますと，これは Discord to Concord，すなわち不和から融和へというメッセージだったわけです。このメッセージは非常に象徴的ですが，その意味はいくつかあって，まずスポーツと文化が融合する，本来スポーツと文化はなかなか融合しないところがあるわけですが，これを融合させようというもの。もう一つは歴史的な遺跡・名所・旧跡ですから歴史と現代を融合させようというもの。

最後に，これが一番ミソともいえるのですが，フランス社会ではオリンピックの直前に選挙があり極右と極左の大きな分断が見られました。その分断について，オリンピック・パラリンピックを通じて連帯感をフランスの国民に与えようという政治的意図があったわけです。それをフランスのプレスは非常に結構なことだと捉えました。スポーツをしていて普段あまり美術品などを見ない人が今後は美術館に来てくれるだろうということです。ただ，私がちょっと不思議に思ったのは，アスリートファーストの精神はどこにいったのか，要するに観客ファーストのような精神が出てきて全体がイベント化し過ぎているのではないかと考えたわけです。これをフランスやスポーツ界がどう受け止めたのか疑問に思い新聞等を読んでみたのですが，その点についての批判はありませんでした。むしろフランス社会の一体感が演出されたということで評価されているようでした。フランスではオリンピック・パラリンピックの開催中に首相が任命されました。首相の任命は大問題になっていて，わざわざオリンピック・パラリンピックの開催期間中に新しい首相を任命したことが何を意味するか，フランス社会の一体感を演出するというためにオリンピック・パラリンピックを利用したという政治的な批判がありました。

次に選手関連の報道について報告したいと思いますが，その前になぜフランスがそこまで連帯感を持ったかと関連して，フランスチームの成績を見てみたいと思います。元々フランスは金メダルの目標が20でしたが，実績は19，総合順位については目標８位のところ実績も８位となり，大体目標通りだったということです。ただ新聞報道を見るとやはり批判もありました。ひとつはメダルを獲得する競技が偏りすぎているという批判です。金メダル19のうち10，メダル総数75のうち28は自転車競技です。また，女子選手の比率が34％で非常に低い。それからフランスがメダルを取った団体競技が少ない。メダルの獲り方に問題があるのではないかというコメントがありました。

次に，選手・アスリートについての報道を分析してみましたが，これは日本におけるパラリンピック関連の報道とそれほど差異はないと思いましたが，日本に比べると選手の精神的な側面に対する報道が多く，かつ深かったように思えました。例えば，自己ベストを出せば良いのか，それともメダルを獲りたいのか，その点についてあなたはどう思いましたか，というインタビューが選手に関する報道の中では目立っていたと思います。もう一つは，スポーツ紙を除いて日本の報道では，個人について新聞の一面や半面を使用して報道することはあまりないと思いますが，フランスでは随分と個人の選手について非常に深い分析・報道がありました。また，今回は日本での報道でも多少はありましたが，フランスの場合は自国以外の外国人についての報道がかなりたくさんありました。

次に大会全体の意義についてです。フランスがパラリンピックを開催したのは今回が初めてです。パラリンピック特有の競技，ボッチャやゴールボールなどの解説が出たり，クラシフィケーションとは何かの説明が出たりしていました。私が注目したのは言葉の問題を整理しようという動きです。日本でもシッティングバレーボールというか座位バレーボールというべきかなどの問題が生じていますが，そもそもパラスポーツを，フランスでは一般的にはハンディスポーツ（ハンディキャップのハンディをスポーツの前につけた表現）と呼びますが，どのような表現が適当かについて議論になっていました。特に注目したのは，フランス語で障がい者を personne handicapée（障がい者）というのではなく，personne en situation de handicap，すなわち「障がいを持っている人，障がいのある人」という表現に変えましょうという動きが見られました。また，日本人はあまりピンとこないかもしれませんが，「椅子」といってもフランス語には二つあり，安楽椅子と普通の椅子では全然異なる言葉になるので，車いすについてどの言葉を使用するべきなのかという注意書きのようなコメントも目を引きました。このようにパラリンピック特有の競技についての解説や言葉の定義などに関する報道がかなり沢山ありま

した。

次の問題点については多くはありませんが，若干フランスの新聞報道でも指摘されていました。

一つは知的障がいの選手が少ないという指摘です。フランス全土では数十万人に上るといわれている知的障がい者ですが，数名しか選手が出ていないというのです。また，知的障がい者がみんな一緒にプレーしていて，クラス分けがされていないという指摘や，参加できる競技が陸上・水泳・卓球しかない，冬季大会に参加できないという批判がありました。

もう一つはジェンダーに関する指摘です。オリンピックのボクシング競技でトランスジェンダー選手をどう考えるかという議論になりましたが，オリンピックのみならずパラリンピックにおいても検討しなければならないということで話題になりました。

最後に一つ余談ですが，ボランティアについて文句が出たという報道がありました。ボランティアの観光ガイドを700人募集したところ，職業としてガイドをしている人から「我々の職を奪うのか」という指摘が出たようです。

おわりに大会の意義について申し上げると，年齢に注目が集まっていました。なぜかというとフランスも日本と同じ高齢化社会で，フランスのパラリンピック選手の平均年齢は33.5歳，オリンピックは26.9歳，フランスの出場選手で一番年齢が高かったのは59歳，14人が50歳以上だったということで，高齢化社会において，いわゆる障がい者の問題のみならずパラリンピックはもっと広い意味で非常に意味のある大会なのではないかということをフランスの新聞が伝えていました。

以上，ご報告させていただきます。ありがとうございました。

４．総合討論

藤田：皆さん，こんにちは日本福祉大学の藤田です。この後一時間程度，四人でディスカッションを進めてまいりたいと思います。よろしくお願いします。私もパリに行きましたが，印象に残っていることは二つあります。ひとつは日本人が優勝すると松原みきさんの「Stay With Me」がかかること，また，陸上競技が始まる前にボランティアの方たちが100mのスタート地点からゴールまで歩いて，その間ボランティアの皆さんが拍手をしてもらえるのが良い取組だなと思ったということでした。ここからは河合さ

ん，渡さんを含めて進めていきたいと思います。河合さん，渡さん，まずは簡単に自己紹介をお願いします。

河合：日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会，JPC の委員長をしております，河合純一と申します。もともと水泳のパラリンピアンで，引退後五年前の2020年からJPC の委員長になり，東京2020大会と北京2022大会の冬季のパラリンピックの日本代表選手団団長も務めました。今日はよろしくお願いします。

渡：順天堂大学の渡と申します。私は障がい者スポーツに関する様々なことを社会学・スポーツ社会学の観点からこれまで研究してまいりました。今日はよろしくお願いいたします。

藤田：では早速ディスカッションに入りたいと思います。最初は強化面です。メダルの数，金メダルが増えたという結果についてのディスカッションをしていきたいと思います。まず，河合さん，日本はメダルランキング10位，14個の金メダルを獲ったということでしたが，このメダルランキング10カ国のうちの７カ国は近年パラリンピックを開催した国です。その辺の影響，日本も含めてパラリンピックを開催することの強化に対する影響について教えていただけるでしょうか。

河合：パラリンピックを開催する時に自国の選手が活躍することは，国民の皆さんに関心を持ってもらうために大きな要素であると IPC も認識もしているので，しっかりと開催国として強化・育成をしっかりやって欲しいという話は出てくる話題かと思います。それに伴って国や様々な関係機関が強化の拠点を整備したり，システムを作ったりすることで結果が出る。その基礎ができることによって，それを活用しながら継続されているというところと，次の大会などしっかりと新たな目標をセットしながら継続的に進めていこうとする姿勢がこれまでの開催国には見られているのではないかと思います。

藤田：ありがとうございます。パラリンピックを開催することで選手強化も含めたシステムが出来上がっていくということですかね。私の調べたところでは日本選手団の平均年齢が31歳ですね。前回の東京が32歳ということで若干若返って，３分の１ぐらいの選手は初めての参加だったのですね。そのことを考えると以前はなんとなくずっと同じ選手が出ているイメージがあったのですが，日本もシステムができてうまく回り始めてい

るのかなという気がします。

河合：そうですね。やはり文科省に移ってちょうど10年，NTC のイーストができて５年，色々な節目節目に様々な施策を打ってきた中での継続的な成果と言えるかなと思っています。

藤田：先ほどのメダルランキングについて，七カ国以外の国の中にウクライナとそれからオランダが含まれています。オランダの人口は1800万人ぐらいで日本の６分の１ぐらいにも関わらず，メダルの数が非常に多くて金メダル27個を今回獲っています。それから，ウクライナは戦争をしている中での参加で22個の金メダルを獲っています。何か特別な理由はあるのでしょうか。

河合：オランダについては NF，NOC，NPC 含めてオリンピック・パラリンピックの組織が全て統合するということを2000年代の前半から進めてきており，もう20年ぐらいの歴史があると思います。そういった中でオリパラ間でのコーチの流動性，コーチングノウハウの共有などが非常に高レベルで実施されていますし，オリパラの強化拠点についても当然同じように強化を進めています。また，国土面積が狭いことを逆に利点と捉え，毎週末国内の強化選手たちが集まって継続的な強化活動がしやすいということ，さらにはメダルを獲っている競技種目に偏りがあると思いますのでそういった得意種目，重点競技，自分たちの強みをしっかり生かした強化策を練っていることがオランダの特徴と言えるのではないかなと思います。ウクライナはもともと強化拠点を持っており，熱心にやっていたことと，チェルノブイリ等も含めた様々な障がい者に対する施策の一つとしてスポーツが盛んになったという話は聞いたことがあります。

藤田：選手強化の社会盤ができているというところが大きいようですね。田口さん，金メダルだけに着目すると日本もリオは０，東京で13，パリは14，とはいえメダルランキングでは10位ということで，これから強化に関して日本がやるべきこと・やれることは何かありますでしょうか。

田口：まずは選手を増やしていくことは大切だと思います。2013年に東京開催が決まり，そこから気持ちの面でも土壌の面でも障がいのある方たちがスポーツにチャレンジすることが広がってきたと思います。より多くの方に情報が届くようにすることは大切だと思います。さらに，先日今回メダルを多く獲得されたオリンピックのフェンシングの強

化の方にお話を伺ったのですが，そうなるまでに20年から25年かかったとおっしゃいますので，私たちもどうやって後押しをしていくかっていうところが重要になると思います。選手を増やすことや競技団体同士がそれぞれクロストレーニングをすること，あとは選手が好きでやる競技ということも大切ですし，自分の障がいにあった競技に転向するトランスファーにもチャレンジできるような環境作りも大切かなと思います。

藤田：渡さん，強化面に関してはいかがでしょうか。

渡：私は専門ではないので難しいですが，ウクライナはやはり昔からかなりメダル数も多い国でかなり意外です。一方で日本やフランスは過去ですと，オリンピックのメダル数は多いもののパラリンピックのメダル数は少なく，バランスが悪いこと自体が国として問題だということが意識された結果，強化という面で現れているのかなと感じていました。

藤田：2013年に東京オリパラ開催が決まり，その翌年から予算がつき始めたことを考えるとちょうど10年。その間の強化とかシステム作りが少しずつ芽を出してきたかなと思います。

田口：あとは競技にもよりますが，マルチメダリストがいる部分も大きいのかなと思います。例えば私のやっている射撃などはさまざまな種目に出ることはできませんが，水泳等ではいろんな種目に出ることができるので，そういう競技を強化していくこともできるのではないかなと思います。

藤田：強化してメダルが獲りやすい競技から獲っていくというのも一つの方策ですかね。

河合：日本は各競技団体がそれぞれ努力している中で，22競技中，今回は21競技に出場しています。この点はある意味で日本の強みでもあるとも思っています。逆に言えば，日本にいる多くの障がいのある方々は全ての競技で世界を目指せる環境にあるとも言えます。現状としてはパラの競技団体がこれほど多くちゃんと存在して組織化されている国はおそらく日本だけだと思っているので，そういう意味でも他の国とは違う発展が今見られているのではないでしょうか。

藤田：まさにジャパンモデルですね。逆にどこを選択し集中するのかという問題も出てきますよね。

河合：やはり世界のマルチメダリストが多い競技は水泳・陸上に偏っていて，陸上については昔五つ六つメダルを獲っていたのも，今は二つくらいまで下がってきている中で，まだ水泳はトップの選手が五つとか七つ獲るという状況があります。メダル数を増やすという観点からは，どういう競技で獲った方がよいかのか。549のメダルイベントの中で，そもそものイベント数は陸上・水泳の順に多く，約6割を占めるのも事実なので，選択と集中という概念でいくべきなのか，それとも他の方向性を目指すべきなのなのか，国としてどう考えるかを今まさに競技団体だけでなくスポーツ庁やJSCともしっかり話をして進めていくことになると思います。

藤田：メダルの数が全てではない，他の要素もあるということですよね。

河合：そうです。今回メダルを41個獲ったわけですが，団体競技を含めメダリストでいうと57人いるんですよ。そうなった時にメダリストがメダルを持って地域で語ったり，子どもたちと触れ合うことでより多くの価値を生む可能性がある時に，一人がたくさんのメダルを獲ることでメディアに取り上げられるというのも大事ですが，本当の意味での地域振興を含めた繋がりという意味で言うと，より多くのメダリストを育てるという発想の転換もあっていいのではないかと思っています。

藤田：ありがとうございます。先ほどの田口さんの発表の中で，メディア席について，オリンピックはきっといっぱいだったにも関わらず，パラリンピックではガラガラだったというお話がありました。私が調べたところでは東京パラリンピックの時の新聞報道の量を100とすると今回が40なんですね。リオの時が60ぐらいでロンドンから前はずっと30未満なんです。パリ大会の報道量は減ってはいるけれどもロンドンよりは多いというのが現状です。田口さん，現場にいらっしゃってメディアの方とも接する機会も多かったと思うのですが日本のメディア報道の仕方，特徴はありますでしょうか。

田口：パリにいたので，どれだけ日本のメディアで取り上げられたのか，私は分かっていません。先ほど申し上げた通り，全体を通すと日本のメディアの数は多いかなと思いました。ただ一方でパリに渡航する前の報道を見ていると，東京大会の時は朝から晩までずっと放送されれていたのが，今回は夜中だけというところはすごく残念に思いまし

た。こうなると，どうしても自分から情報を取りに行くことが必要になります。例えば，朝から晩までテレビで放映されていると，「あ，パラリンピックやってるんだ」と自然と入ってきますが，そうでないと興味のある人が自ら情報を取りに行くしかないという差は大きいと思います。

藤田：河合さん，いかがですか。

河合：日本のマスコミの方々の来ていただいた数は他国と比べ，すごく多いと思います。多分フランス・イギリスなどと並んで多いのではないかなという印象はあります。ただ，いわゆるアウトプットとしての映像放送時間とか紙面の量で示されると東京と同じ量は厳しいと思います。自国開催という違う要素がある中で，どこが着地点として理想的だったのかについては我々も持ち合わせてないと思っているので，量が増えればいいのか，質はどうなのかという面もあると思いますので，今まさに次のフェーズの議論ができる素地が整ったという認識です。

藤田：渡さん，その報道の中身のことに関してですが，今回も報道内容を見るとやはりメダリスト中心の報道が多かったんじゃないかなと思います。共生社会を作っていく中でそこを突破口にしていくと考え方もあると思います。一方でエイブリズムというかできる人が偉いんだ，パラリンピアンは偉いんだ，では，できない人はどうなんだという議論もあると思いますが，そのあたりはどうお考えでしょうか。

渡：私も大会期間中はパリに見に行っていたので，日本の報道が具体的にどういうものだったのかを直接リアルタイムで確認してはいないんですが，やはりメダルを獲得する選手が多く取り上げられるのはある意味仕方がないことだとは思います。そこに関しては河合さんがおっしゃったような質の問題が出てきていると思います。これまでの傾向だと，特に障がいに打ち克ってスポーツにチャレンジしてメダルに到達するというような，ある種ハードルを乗り越えていくようなモデルでパラリンピアンは表現されやすかったと思います。メダルを獲ることができるというのが社会から見て良いことだと捉えられるのがエイブリズムです。スポーツの楽しみ方はメダルを獲ったり誰かに勝つことだけではなく，スポーツすること自体の楽しみがあると思いますが，その辺が浮かび上がってこなくなってしまい，障がいがある人たちは障害があるというだけで「今度パラリンピック出るんでしょ」と言われてしまったり「金メダル獲ってきてね」と言われてしまうような問題がある。つまり，ただいることに価値がなくなってしまうような問

題があるので，スポーツ報道はそこにどう対応していくのかはとても大事だと思います。

その意味では先ほど田口さんがおっしゃった，スポーツの大会として取り上げるということはとても大事です。例えばパラリンピックのCMで一番有名なチャンネル４のパリのCMは，重力と摩擦と時間という観点からアスリートが立ち向かっていくんだというスポーツそのものにフォーカスするような描き方をしているが注目されました。アスリートは一体何に立ち向かっているのだろうか。それは障害である場合もあるでしょうし，スポーツの中の制限みたいなものに立ち向かっていくでしょうし，アスリート自身はアスリートだけでなくチームとして立ち向かっていく部分とか，あるいは負けた選手をどのように語っていくか，パラリンピックに出た，あるいはパラリンピックまで至らなかった選手たちをどのように取り上げていくかが非常に重要なのかなと思っています。

藤田：報道を見る側はどのように見ればいいのでしょうか。

渡：これまでどのようにスポーツと付き合ってきたか，障がいのある人たちとどのように付き合ってきたかにかなり依存してしまうので，パラリンピックをどう見るかについてはパラリンピック以外の部分で私たちの社会が障がいのある人だったりスポーツをどのように理解すべきなのか，あるいは考えるべきなのかをより強く意識する必要があるのかなと思います。パラリンピックの時だけこのように見ましょうと言ってもなかなか難しいと思うので，社会全体の問題として考えていく必要があるのかなと思っています。

藤田：そういうディスカッションをいろいろな場でできるといいですね。もう一点渡さんにお伺いしたいのですが，これまではテレビ報道だったものが，今はインターネットやストリーミングなどさまざまなものが出てきていて，何を元にみんながパラリンピックを見てくれたねと判断していけばいいのでしょうか。

渡：とても難しいですよね。今の政治でもよくSNSと，テレビ・新聞などのオールドメディアが対立的に語られたりすると思いますが，確かにSNSでコメントしている人たちの数をどう捉えていくのかは一方で重要ですが，いわゆる伝統的な新聞・テレビ報道量の重要性は変わらないのかなと思っています。伝統的なメディアにはある程度の一貫性が見て取れると思います。例えばロンドン・パラリンピックを見た人が今も変わら

ずSNSで発信しているのはかなりマニアックな人だと思います。かなりバイアスがかかっている指標になると思うので，その意味でテレビや新聞の報道量がどれだけあったかについては非常に重要だし，そこに着目していくことでメディアが持っている組織力や感性に訴えていくことができるという意味で，これまで通りの指標は重要だと思っています。SNSをどう捉えるかについては今後の課題としか言えないところはあるのではないかなと思います。最近はSNSから逆入して伝統的なメディアに来るもものあるので，SNSが盛り上がるとメディアの報道が増えるといった関係を見て取れれば，いわゆるオールドメディア的な報道量でも対応できるのかなと現時点では思っています。

藤田：田口さん，今SNSのお話が出てきましたが，東京大会の時には選手に対する誹謗中傷が非常に大きな問題として取り上げられましたが，今回選手たちに何か注意をしてもらったこととか，選手団としての心がけなどはあるのでしょうか。

田口：以前からSNSの使用方法という部分ではさまざまな研修会も開催されており，選手も含めて選手団全員が参加しております。東京大会の時はコロナ禍での開催ということがあり，選手がというよりは大会自体に色々なご意見があったからこそ，さらに選手に対して誹謗中傷が出てきたという部分もあったのかなと思います。今回全くなかったということではないですが，何人かの選手とそういうことについて話しましたが，選手によっては言われることもあるけれど自分たちも気をつけているし，できるだけ感謝の気持ちを伝えたり，ポジティブな発信をしてそういうことにならないように気をつけていると話していました。河合さんはJPCとして何かお聞きになられていますか。

河合：いま田口さんがおっしゃったように，インテグリティの研修会等の中でもSNSの活用についてはお伝えをしています。ただ，一歩間違えるとSNSを使わなかったり見なきゃいいんでしょう，みたいな話に飛躍する時があります。一方で，SNSをうまく活用することでアスリートや競技の魅力をしっかり発信することも重要な役割であるため，どうやってより良く付き合っていくかが重要であると思っていますので，誹謗中傷をなくすように我々もしっかりと皆さんにお伝えをするものの，なかなかゼロにしきれない中でどう上手くフォローしてくのか，アスリートのメンタルヘルスとかウェルフェア，ウェルビーイング，このあたりが次のテーマになってきていますので，どう対応していくか我々の大きなテーマかなとは思っています。

藤田：選手団として選手に注意したとかそういうことはないのでしょうか。

河合：オリエンテーションの際に我々からお伝えして，何かあれば事務局というか本部のところで対応するということをお伝えしていますのでパリ大会の期間中には大きなものはなかったのではないかなと思います。

藤田：次に東京大会との比較と言うとあまりにも違いすぎてなかなか難しいところありますが，今回は有観客になり，観客の反応や会場の雰囲気は率直にどうだったかをお聞かせください。田口さん。

田口：いずれの会場も多くの観客の方がいらっしゃっていましたし，またコミュニケーションが取れることが東京大会の時と大きく異なりました。東京大会や北京大会の時はどうしても感染症対策のことでコミュニケーションを取ってはいけない状況でした。しかし，今回のパリ大会では選手と観客もそうですし，ボランティアとのコミュニケーションもそうです。みんながいろんなコミュニケーションを取って一体感が醸成されたり笑顔で触れ合えるところには違いを感じました。実は，選手村をユニフォームで歩いていると「日本ありがとう，東京ありがとう」とすごく言われました。私が「今回有観客で盛り上がっている姿を見るとすごく残念に思う」という話をすると「東京があのようにやってくれたから今この大会があるんだよ。ありがとう」と本当にたくさんの国の方から言われました。したがって，違いはあるが開催国は努力して開催したんだなと思います。さらに，パリに行くまでに私が聞いていた話では，フランスの方は英語で喋りかけてもフランス語で返してくるとか，他人には興味を持たれない方が多いという話もあったのですが，全然そんなことはなく，ボランティアの方も観客の方もどんどん英語で話すし，日本語で応援してくださったり，皆さんすごいオープンマインドで色々話してくださったり，選手に対してのリスペクトを感じました。それは選手たちもすごく感じていて，それも力になったのではないかと思います。

藤田：具体的にどんなところでしょうか。

田口：例えば，拍手とかもそうですが，日本が勝った後に私たちがジャパンのユニフォームを着ているだけでもみんなが拍手してくれるし，メダルの授与式の時に前に座っていたフランスの観客の方が，わざわざ私たちがいる後ろを向いて「本当におめでとう」と言ってくださったりしました。それがたとえ日本がフランスに勝ったとしてもです。実際の試合中はフランスの応援がすごいのですが，終わった後は本当にドローになるのを感じました。

藤田：河合さんは会場を回られていかがでしたか。

河合：開会式や水泳などを見に行きましたが，東京2020は一生懸命準備をしていた側なので，最初は「こういう場面が東京で作れたはずなのにな」というジェラシーみたいなものは正直ありました。二日三日と経つと慣れてきて，これこそがスポーツのあるべき姿だし，そういう場面を作ってくれているフランスの皆さんありがとうという気持ちにもなっていき，選手たちが活躍してくれていることも含めて嬉しかったというのはあります。

藤田：渡さんはいかがでしょうか。

渡：私は純粋に観客として行ったので，世界遺産や街中を使っていることでアクセスもしやすかったですし，楽しかったなと思います。エッフェル塔を見ながらブラインドサッカーを見るとかすごくいいなと思いました。やはり，僕もそうですが皆さんブラインドサッカーの会場に着いて席に座ってまず目の前にあるエッフェル塔を写真で撮るのはますごく印象的だったなと思います。一方，全て仮設になっているとアスリート・センタードで考えた時に，試合会場の質という意味ではどうなのかなと思いました。例えば，ゴールボール会場は展示場の中に作られていたので，後方で掃除機をかけている音が試合中にしていたりして，これは大丈夫かなと思いながらやったり。また，会場でよくオーシャンゼリゼをみんなで歌うシーンがかなり挟まれていたのですが，試合のタイムアウトが明けているにも関わらず歌がまだ続いてるなど，そういう意味では演出や会場の仕組みと試合・ゲームのバランスが難しいなと思ったので選手の皆さんに聞いてみたいなと思いました。

藤田：私も陸上競技場にいる時に，九万人の観客が入ってフランスの選手が走った時の地鳴りのような応援を聞き，河合さんのように嫉妬しました。これを日本の選手にも味わさせてあげたかったと思いました。皆さんおそらく車で回られたと思いますが，街のバリアフリー度や動きやすさに関してはいかがでしたか。

河合：私は一部地下鉄とかに乗ったのですが，フランスの大使館の方とお話しした時に，ホームドアが設置されているのは二つの路線だけだと言っていました。東京はおそらく90何％というレベルだと思いますが，パリのバリアフリーの度合は８％ぐらいだそうです。大会開催までになんとかしようではなく，大会を開催することを通じてもっと加速

させていきたいという発想の柔軟性を感じました。また，ホームドアができたことの優先順位ひとつとして，組合の方が多いのでストライキが起きることが頻繁にあり，その時にホームドアになっていると全自動で動かせるため，ストライキがあってもここだけ動かせるという社会インフラとして重要なんだという話を聞きました。そういう発想は日本にはないなと思ったり，それぞれの国民性や国の制度も影響しながらインフラ整備やアクセシビリティが進んでくということも感じました。

藤田：車いすユーザーの目線ではいかがでしょうか。

田口：私，実は街に出ていません。開会式の時と大使館に伺った時だけなので，本当に少しだけなのです。聞いたところによると，途中で地下鉄のバリアフリー化もやめるということは発表されていたのですが，一つの路線だけがバリアフリーになっていてあとは階段とかで車いすユーザーが一人で移動するのは厳しかったと聞いています。あとは現地の方々にお聞きしたところ，パリ市内はアパートメントが多く，古い建物なのでエレベーターも立って乗れるのも三人ぐらいで一家族が二回ぐらいに分けて乗る。また，ガラガラと自分で閉める扉なので車いすユーザーはどうやって生活しているのだろうと疑問に思いました。私は会場から選手村などの移動を車で行っていましたが，車の中から見る限りは選手以外の一般の車いすユーザーが街中を歩いている姿を見なかったことを思うと，車いすユーザーは外出しにくい環境なのかなと思います。ただ，この大会を開き，多くの方々が障がいのある人たちを見ることによってバリアフリー化をどうやって進めていけばよいのか，また全てを新しく立て直すことがよいのか，現存するその世界的な遺産をキープしていくことも大切なので，バランスをフランスの方々も考えていって，ハード面のバリアフリーなのかソフト面のバリアフリーなのか考えていただければ良いなと思います。

藤田：日本は新しいものに価値があるが，イギリスとかフランスとかは古いものに価値があると考えるので，そこの違いも大きいのかもしれないですね。渡さんいかがでしょう。

渡：私はパリで知り合いの車いすユーザーの方と一日過ごしたのですが，ローランギャロスでテニスを見た後ちょっと北の方の友人宅まで歩くという時に，車いすのコースはこちらですよと案内されたコースが砂利道だったり斜めになっていて，案内されていない普通の歩道の方が車いすが通りやすいということがありました。そういう面では，しっかり整っていたかというとそうでもないというのが実際のところですね。二日目に

その方とアリーナに行った時も，その方は地下鉄で来られなかったのでタクシーで移動してということがあったのでなかなか難しい面もありますね。実際にパラリンピックの観客の中にもそれほど車いすユーザーの姿を見なかったというのは印象として残っています。

藤田：私も街中を歩いていても関係者のような車いすユーザーは見るけれども一般の方は見ない，視覚障がいの人もあまり見なかったという印象です。その国の実情や価値観，法律などに合わせてやっていかなければならないので，どれが良い悪いではなく，いろんなやり方があるのだろうなと思いました。

河合：先ほど渡先生がおっしゃったように，フランスが決してパラリンピックのメダルランキング上位にいたわけではない中で招致が決まって，そのできる成果を上げられるところに注力したのが強化面で言うと実情だと思います。招致が決まった頃はパラリンピック委員会の職員二，三人しかいないと聞いていたので，そういう意味での違いは大きいのだろうなとその頃から感じていました。逆に言うとオリンピック・パラリンピックをきっかけに一体的にやっていく方針だともおっしゃっていたので，この大会をきっかけにもっと発展させようっていう考え方なのだと思います。日本は大会までに一つの成果を上げて，そこからはレガシーとしてどうしてくかという発想からすると異なる捉え方をされていたのかなという感じはします。

藤田：国の法律がどうなっているかによってレガシーの中身も変わってくると思います。日本もスポーツ基本法ができる前の2016年大会の時にオリパラ招致が決まっていたら，もしかしたら今ほど進んでいなかったような気もしますし，国の実情で変わってくるのだろうなと思います。

田口さん，今回ロシアとウクライナの戦争の中での開催ということで，ロシアの選手とベラルーシの選手は中立であることが証明された方に限定されて，国のユニフォームとか国旗をつけられなかったりしたわけですが，その点について何かありますか。

田口：国の事情によってパラリンピックを目指していた選手がこのような出場方法しかできなかったのは残念だと思う反面，中立のパラリンピック選手という形であったとしても出場できて自分たちのパフォーマンスを世界に出せたということは良いのかなと思います。メダルセレモニーを見ているとNPA（Neutral Paralympic Athletes）の旗が上がっておりまして，一方で私たちは日本の選手たちが活躍して日の丸を見て嬉しく

思っておりましたので，ロシア・ベラルーシの選手個人の気持ちを思うと本来はやっぱり国旗を上げたかったんだろうなとか，そこで感じることが色々あったんだろうなと私自身は思っていました。

藤田：渡さん，スポーツ社会学者としてこういう状況，スポーツと政治とか国際関係との関連性・関係性はどう考えますか。

渡：今回，ロシア・ベラルーシの選手が個人として参加することになったのはIOCとの関連で言うと仕方がないことだと思います。IOCとしては世界平和を目指す運動がオリンピックムーブメントですから，そこに抵触するものに関しては致し方がない部分はあると思います。その一方で，イスラエルの選手は出場できていることからすると今回問題だとされたのは国と国とが戦争しているという政治についてであり，一方でそうではない政治的な課題，アラブの問題やジェンダー・セクシュアリティやエスニシティの問題などたくさんありますが，取り上げられるのは国と国における政治の問題だけという点でIOCやIPCが取り上げる政治は一体何なのか，これだけは取り上げられて別は取り上げられないところにある差は一体何なのか，スポーツと政治の問題を考える上ではしっかり考えていかなければいけないと思っています。

藤田：河合さん，何かコメントありますか。

河合：東京2020大会にロシアが出られなかったのはドーピングの問題であって，北京の冬の大会からその後の二年あまりの中でIPCも総会等で話し合った中での結論だったと思うので，渡先生がおっしゃる通り，オリンピック休戦のような国連でもサインをしながら進めているが進まない中で，それを目指しているからこそ成り立っていたものすらも無視されてしまっているというか形骸化しているように見えるというのは，スポーツ関係者にとって非常に残念であり，自分たちに何ができるんだろうというのは常に思うところではあります。また，戦争で傷ついた方々の中からパラリンピックに出場する人が出てくるという状況も各国では生まれてくるわけですが，それに対する難しさなど，整理がつかないところは正直あります。

藤田：スポーツ社会学では，スポーツは政治とか経済とは違う文化であって，そういうの関係なくやればいいんだよという考え方がある一方で，実際そうはいかないというところでスポーツの力ではなく，スポーツの無力さにどう向き合っていくか，今後の国際

情勢，IOC，IPC も含めてどう進めていくのかについては答えがないだけに難しいですが，ちゃんと考えておかないとパラリンピックやオリンピックは新たな政治の道具とし使われることはないようにすべきかなと思いました。

河合：国の予算を使っている部分や民間企業の皆さんから頂いたものを活用しながら活動しているという意味では，政治や経済から切り離されたところにスポーツがあるわけではないというのは一つのリアルな姿だと思っていますので，今後それを含め，ただ体を動かして人々がスポーツをして障がいの有無を超えて楽しめる社会とかそういう価値観そのものはどこにいっても普遍なんだろうなとも思うところもあるので，この二つをどう共存させていくのかっていうのが次のテーマなのかなという感じはします。

藤田：ちょっと視点を変えてお話を伺いたいと思うのですが，渡さんは東京大会が終わってからの三年間，日本のパラ教育はどう推移してきたとお考えでしょうか。

渡：東京大会の招致が決まってちょっとしてから東京都あるいはスポーツ庁でもオリパラ教育というものがスタートしていったわけですね。これは一年延期されても2020大会に向けて準備されてきました。そこではたくさんのオリンピアンやパラリンピアンが講演に行ったり各学校でパラリンピックやオリンピック種目を体験してみるという体験教室のようなものがかなり行われてきて，一定程度の意味があったと思っています。その集大成が大会を観戦する学校連携観戦だったわけですが，オリンピックではほとんどなく，パラリンピックだと結構な数の子どもが観戦に行っていたというところです。2021年から今にかけて少しずつ減ってきている，取り組み自体は盛り下がっている状況にあるかと思います。明確にオリパラ教育という名前で東京都や千葉県が制度的に実施している活動はなくなってしまいましたので，実際にはレガシーとして各学校で取り組んでくださいという形になっているので以前の状態に戻ってしまっていると思います。障がいというものをどう考えるかや，身近に障がいも含めた多様な人たちがいる社会をどう考えるかを理解する上では重要な教育活動が行われれてきたと思っているのですが，それがなくなると取り返すのが難しくなっていくと思っているので，今後できるだけ仕組みとして継続できるように取り返していくことが非常に重要だと思います。現状だと各学校の先生方の情熱や個人的な関心とかによってパラリンピックやパラスポーツ，障がい者の理解が行われるにとどまってしまうような状態なのかなと思っています。

藤田：JPC もオリパラ教育に関わっていましたけども今の状況はいかがでしょうか。

河合：今も『I'mPOSSIBLE』日本版はスポーツ庁からも予算をいただきながらデジタル化ですね，動画とかアニメーション教材とかを作って使いやすいものを提供していこうという取り組みをしています。学習指導要領の改正がこの10年の間にあった中で初めてパラリンピック教育というものが入ってきて今それを実施しているという段階で，もう５年後ぐらいにまた改定があります。つまり二，三年後に新たな改正に向かったヒアリングや会議が進んでいく中で位置づけて固くしていくためには，しっかりとより詳細に書き込んでもらう作業であったり，教材化される教科書の方にどれぐらい載せてもらえるのかとか，それを通じて先生方が扱う教材の一部としてこれをどう捉えていくのかという段階なのではないかなと思っています。我々としてはパラスポーツやパラリンピックというものを通じて，このコンテンツが多様性を理解するための教材としては非常によくできている部分が多分にあるということをどううまく伝えていくかとか，先生方が使っていくことで子供たちにどういう変化が生まれることをうまく伝えながら，先生たちも忙しい現場もありますのでそういうことを含めて進めていく段階だと思います。もう一つは中学校の運動部活動の地域移行問題もありますので，通常の学校だけでなくこの障がいの有無を超えてどうやってお互いに分かりあって，お互いを生かし合ってく社会を作るか，あるいはコミュニティを作ってくかを考えていかなければいけないのだろうなと思っています。

藤田：河合さんがおっしゃっているフルーツポンチ型の共生社会は東京大会が終わってから何歩くらい前に進んだのでしょうか。

河合：どうでしょうか。ただ，イメージを分かってくれる人は増えてきていると思いつつ，講演会などに行った時に「障がいのある方にどう声をかけたらいいのでしょうか」という質問は相変わらず出てきます。最近よく言っているのは，どう声をかけたいかとか，どう声をかければベストかなどはないので，今困っていそうだと思った人に自分にできることは何かを考えて声をかけるしかないと思っています。この間，小学生の男の子が僕の後ろをうろうろ歩きながらつぶやいていたんです。よく聞き取れなかったのですが，右だよとかって言って誘導してくれていたようです。その時，実は私は一人じゃなくて一緒に歩いている同僚がいて二人で歩いているので私は困ってはいないのですが，その子供からすると「このおじさん目が見えないからなんか言ってあげたらいいんじゃないか」と思って素朴にエレベーターだよ，エスカレーターあるよみたいなことを言ってくれていました。子供達は思ったら素直にできることがあるので，大人たちも今この人は何に困っているのかという想像力を働かせながら気軽にお声かけいただけると

いいのではないかなと思います。エスカレーターも登りと下りがあるところに私もどちらか分からずイチかバチかで乗ろうとするのですが，この間も「ああーー」ってすごい声をかけてくれた人がいて，言葉が出るか出ないかとか，どう言えばいいかよりも本当に人に危ないことを伝えたいのであれば何でもいいはずですから，100点満点の答えを求めずにやることが伝わっていけばいいのではないかと思います。共生社会というよりも，子供さんの背が低くて，どうぞと取ってあげる大人がいるのも同じだと思うので上手く伝わるといいなと思います。

藤田：では，質問が来てるようなのでお願いします。

司会：上智大学名誉教授の師岡文男先生からいただきました。日本では東京大会後，組織委員会，JPC，JPSA，JOC，JOA などが協力して東京2020大会大学連携レガシーネットワークが設立され，毎月約700大学にオリパラムーブメント情報が送信されており，藤田先生も運営委員を務めておられます。パラリンピック大会における大学の関わりや大会後のレガシーを生かしていく大学や学生の活動についてご存知の方がいらっしゃいましたらお教えください。とのことです。

河合：上智大学は５月にフランスの視覚障がい者団体，ブラインドサッカーの関係者も呼んでイベントを開いて障がいのあるなしを超えてスポーツを楽しめるようなことを，GoBeyond が中心になって運営をされていましたので，そういう取り組みはフランスの大使館の方などもいらっしゃって，まさに国際連携，学生たちの活動と連携してはやっていました。パリに向けてそれぞれの大学の学生や卒業生が出場すると，その応援をやっているのは見たりしました。

藤田：日本でできた大学の連携ネットワークはこれまではなかったと伺っているので，なかなかないのかもしれないですね。

司会：続きまして，読売新聞の結城和香子様からです。パリ大会ではラグビー，テニスなどパラリンピックの競技レベルの高さが強く印象に残りました。田口さん，河合さんにその背景をどう捉えていらっしゃるか，パラリンピックが社会に伝えるメッセージや影響力をどう変えていきうるのかを伺わせてください。とのことです。

河合：特に車いすテニスは小田選手や上地選手を含めて金メダルを獲っていますし私も

感動しました。これまでの国枝さんの活躍で競技性とかプレイそのものが凄いとか面白いと思ってもらえるマインドが根付いてきた，牽引されてきた中でどんどん競技性が上がり，それに付随してこのレベルじゃないと勝てないからまた皆さんが研究してというのを繰り返してきた結果なのかなと思います。四年後はもっとすごいレベル感になると思いますし，それこそがハイパフォーマンススポーツと呼ばれるものの魅力なのではないかと思います。

田口：私も現場で金メダルを獲る瞬間も見させていただきましたが，本当にレベルが高いと感じました。いろんな競技レベルの高さもありますし，それぞれの競技のルールをより多くの方が知るようになったのかなと思います。東京開催が決まった後，前の会社の同僚が「車いすラグビーってボールを持った人の方が点を入れるんでしょ」としか知られていなかったんですね。でも実はその中には決められたタイムでこうやるとか，いろんな戦略が盛り込まれている競技じゃないですか。でも，それを知らないとただボール持ったチームが入れて，たまたまミスしたられて終わりみたいな，そういうイメージを持っていた人が多かったです。ですので「いえいえ，違います。いろんなルールがあってその中で体も使いながら頭も使いながら，またコーチ・監督も戦略を練りながらやっているんです」とお伝えしましたし，車いすラグビーの皆様もずっと伝えていらっしゃったので，ルールを知ったからこその技術の高さを皆さんに知っていただけたのかなと思います。

司会：只今一つコメントが入りまして，大学連携に関してですがパラ水泳連盟と東洋大学が連携協定を結び，パリ代表の田中選手との交流やパラの理解促進をしている事例がありますとのお声が届きました。ではまた藤田先生にお戻しいたします。

藤田：先ほどの競技レベルの高さについて，スポーツってそういうもので最初の方はちょっとやればすぐ強くなったのが，今はもうかなりやらないと少ししかレベルアップしないというところに少しずつパラリンピックの競技も入ってきたのかなと思います。それをサポートする国のシステムや仕組み，お金，そういったものがあるのだろうなと思います。ボッチャも今回二つしかメダル獲れていないのですが，だいぶ周りの国のレベルが高くなっていると聞いております。では，最後のコメントとして皆さんに今後のパラリンピックのあり方，あるいは東京からのレガシーを引きついでいくためにどうすればよいのか，情報が色んな人に行き渡るためにはどうすればよいのか，あるいはロサンゼルス大会に向けてやるべきこと，どういう観点からでも結構ですので一言いただけ

ればなと思います。

渡：先ほどの話のようにパラリンピックの競技レベルが非常に高くなっていく中で，よく言われるオリンピックとの違いは何だということは今後のパラリンピックの課題としてずっと続くのかなと思います。スポーツとして見ていくのであればオリンピックと一緒でいいじゃないか。もちろんオリンピックと統合したって大きすぎて一緒にできないと思いますが，その時にパラリンピックはどのような価値を標榜してオリンピックと違う価値があるのか，あるいはムーブメントなのかを IPC だけではなく関わる我々も含めた，あるいは選手たちも競技力の高さだけではなく何を訴えることができるんだろうかを言語化していくことが重要なのかなと思います。その中でいつでも変わりうるものだと思いますが，オリンピックとは違うパラリンピックのレガシーとか価値というものを明確にして考えていくことが今後重要なのかなと思っています。

河合：JPC としてはパリ2024大会の直後に選手やスタッフからフィードバックをいただいております。我々としてはエビデンスに基づいた次の対策を立てていくことが大切だと思っています。大会期間の直前直後ぐらいまでの話にはなりますが，ここにたどり着くまでの三年間，競技団体やアスリート個人も含めて，東京後に何に取り組み，それがどういう結果に結びついたのかを総合的に検証していくフェーズに来ていると思います。2024年11月から始まっていますが，スポーツ庁とも一緒にこの間の取り組みを有識者の皆さん交えて進めています。来年はアジアユースパラがあり，2026年にミラノ・コルティナ2026パラリンピック冬季競技大会，愛知・名古屋でアジアパラ競技大会がありますので，こういう大会を経て2028年ロサンゼルスで開催される LA2028大会に向けてどう生かしていくのかを改めて皆さんと議論して新たな一歩を踏み出すタイミングになるんじゃないかなと思っています。数ヶ月かかると思いますが検証しながら進むべき方向性を見据えて，2028年ロサンゼルスや2032年ブリスベンくらいを見据えて中長期で皆さんと進むべき方向性，そして共有すべき価値観をしっかりと把握して進めていけるといいかなと思っています。

田口：選手だった立場としては今後のパラリンピックのあり方としてスポーツとして楽しんでいただきたいのが一番にあります。先ほどのメディアの取り扱いで言うと，日本に帰ってきて嬉しかったことは夜のニュースのスポーツの中の一つにパラリンピックの上地結衣選手が優勝したというのも流れてきて，少しずつ変わってきているなというのは感じているところです。パリから帰ってきた後に地方とか自治体の方々と会う機会が

多かったのですが，それぞれの方が自分の地域にこういうパラリンピアンがいて，この人たちがメダルを獲ってとっても嬉しかったとか，この間挨拶に来てくれたとか，皆さんがすごく喜んでくださっていることを思うとやはり今後も自治体の方々と協力し合ってパラリンピアン・パラスポーツを普及啓発していくことがさらにパラリンピックを盛り上げていくことなのかなと思います。私自身としては，私たちパラリンピアンがきちんと伝えていくこと，発信していくことが少しずつ社会を変えていけるのではないかなと思いますので，選手の皆さんにも是非みんなに伝えていってほしいなと思います。

藤田：東京が終わって三年経ち，恐れていたパラバブルがそんなに弾けていないのかなという気がしています。それはパリでの結果もそういうことの表れではないかなと思っているんですが，「もうやめた。これでおしまい」となったらレガシーはなくなってしまうので，その時々の課題や情報をどう届けるかであるとか，トップとボトムをどう繋げるかとか，いろんな課題が出てくると思います。競技団体の資金をどう集めてくるかも大きな課題だと思いますが，そういう課題を解決しつつ成熟させていくことが必要で，その歩みを止めないことが一番大事だなと感じました。

短い時間ではありましたが，パリパラリンピックを振り返っての報告とディスカッションをここで終わりたいと思います。